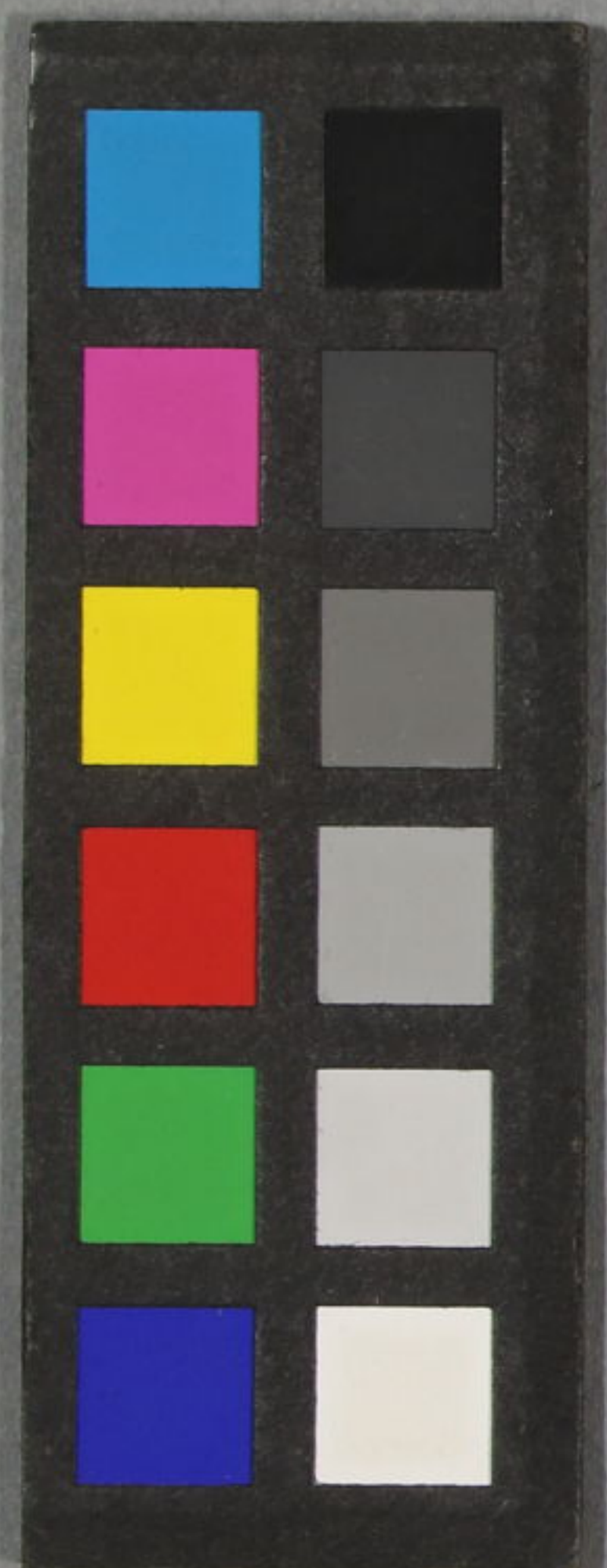


霞山句集

^ 5

2182

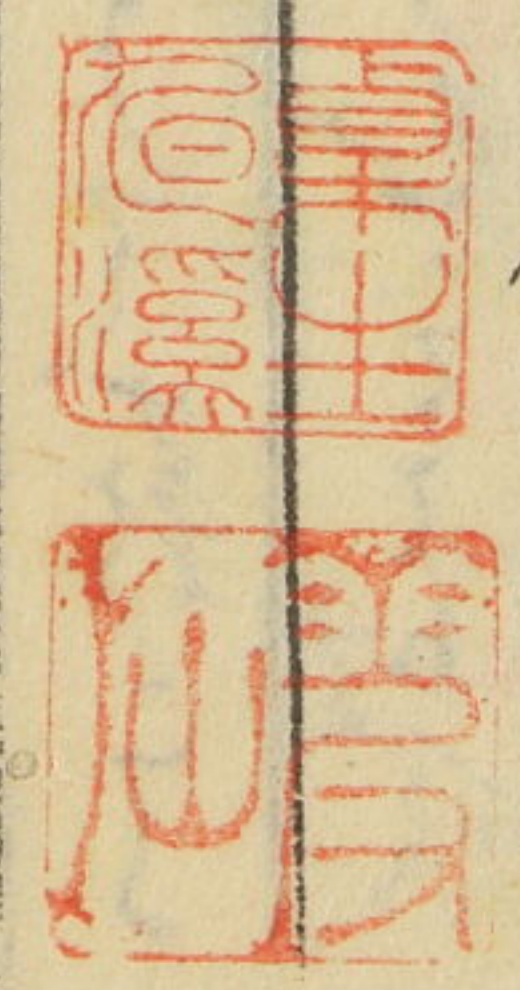


のこころにありし心一統をば口のふた
とどろけしとちちんかんと

みゆ九十年

ほ生

藤年



春の部

藤年 濤氏遺愛之記

階ても三月ら一きかふい可し申
壽をたもめて魚をさし山路に
梅ももみもさ力も一れ鏡應
うめちもささちもささま月
行よして月ささひらさ酒梅は
暮るぬるる月のあつさし梅は
梅ももみもささささささ

けす敷の入口はあり梅の月
若くして梅の冠の山並に
明徳を成せたるの柳の如
柳ふく経つけさも三波の
宿系もたるぬらする梅の
心算うけは梅さやある梅の
二三のぬらする柳とありより
目笑しにありたる梅の
柳より先時のつらさなる
波のぬらする梅の余の
歩みさつ波のぬらする
若くしてありたる梅の
さねにありたる梅の山
のぬらする梅の山並に
ちぬのちのぬらする梅の
梅の山並にありたる梅の
二月が

言はぬ心と申すはなれり
ついでに
花子や
を
名
つく
二
と

市
橋
と
い
杉
と
喜

偶
田
川
五七

海はのしく打よきし 物うな
苗代でいふあまを以んぬの山
海山あの中よりひそめし 梅うな
むやうしつそりのおもひぬや梅
遊方や角の小糸の赤つそき
いつ候てふれ経あるや赤糸
汗流す候てふれしき 幸来は
永きりやふ流りし人のつて

陽あの中下ゆく種うなる
むすぬけ赤まふくや梅の形
志さぬかきうり か糸の紐も
志ちるやりきうりし 下
あのお雨花らるるききし
あまらるるをふれりし 志
遊寛永 入あ下まきうりの中をきしして
自愧 世の梅は生庭訓 公治也

山つらふらふとてはなほ
おのれはあはれいそ
おのれはあはれいそ
おのれはあはれいそ
おのれはあはれいそ
おのれはあはれいそ
おのれはあはれいそ
おのれはあはれいそ
おのれはあはれいそ
おのれはあはれいそ

何の江の岸の小舟で残ひな
涅槃會や空つひけと續く
終る人ふあり馬跡
志ふるや朝の光さし
那梁のやまめり
乞食や月いそ
山の草や三月を
けまや只ふれ

な
の
部

柿田いづれをまゝちり
袷をちりて忘れり
侍奉の二に
いづれに月が

つやに月をのりて
まゝのまゝ
なまや月ももの
又こころも
大空の
卯の花の
武庫山の
米炊く

叡麓
茶店

まをす子向えりうのほらんこのけ
ちあうなゆりてあるほらん
芥子ちりりてまをすこら松の動も
解のそりりても解さけりりてある
彩石二の隙うへんゆりりてある
叶の目をさきりりてある
垣さやうりりてある
ぬりりてある

惘者

郭とあやうりりてある
まをす子向えりうのほらんこのけ
ちあうなゆりてあるほらん
芥子ちりりてまをすこら松の動も
解のそりりても解さけりりてある
彩石二の隙うへんゆりりてある
叶の目をさきりりてある
垣さやうりりてある
ぬりりてある

荒の子のふくして席や等の御
 夕のれをすの影で原あ
 六月で家を捨ひよあつた
 六月とまゝのふし軒のあ
 昔のといふてあつた十府の荒
 板板のふしあつたあつた
 まれ月余の住居いよええし
 まれ月あつたあつたあつた
 馬の子の料ふあつたあつた
 夕月あつたあつたあつた
 打ちのあつたあつたあつた
 甲のあつたあつたあつた
 産子やあつたあつたあつた
 そのあつたあつたあつた
 さいのあつたあつたあつた
 おうしあつたあつたあつた

石う石を煮んてあやまや苔はあ
人顔のまき那うう了しうが
龍燈の杵の下ある。屋に作る
まつあてううんあまよ格 二前
布川の遊。仰あやたうむしあ
海。秋。空。海。魚。あ。う。う。

秋の部

字留の袋 縫うう。と。秋。の。秋。
たう秋。下。掃。除。し。う。り。海。田。堂。
相。一。葉。ふ。又。石。を。煮。て。一。葉。う。な。
三。子。の。繪。合。を。見。て。一。葉。ふ。か。
緒。と。く。と。釣。を。う。う。ぬ。た。相。一。葉。

王照君

柳ちんきもろくく 鳴ぬりた
きよ波のよさをい 初く 燈籠が
魂をぬてせきそい 月のみさき 心
名をきんをいふら いきふん 家のか
大元のころとともらう 州の家
こころよくいふる 秋や 家のか
古寺や 夕暮ら 家のある 樹
朝吹の秋風 けいけい 思ひう

秋風で 積りて 山が 刀
おもしろ 秋をきく 家か
いつの朝も 白く 木 橙が
朝もや 霧一ふる の 秋の 衣
度ふし 十りの 雨を 濡りし
夕ぐれを 照れを おひて 秋の 葉
朝くの 雲を ちかふ 秋の 空
月を 照らす 雲を 巻

壁一重あり月ありさくらさ
梅未だ寛くさす不二苑
八朝アウリしるる^え沖の雲
八月とわさけけし海くは
唯々アウリかかれぬ鐘の音
唯々アウリかかれぬ鐘の音
空の谷の結ひらりて落し
京下もね多なるるさくら

山崎アウリかかれぬ草
うつろいと鶴もまねてはさ
野^立や遊^立行^立の^立事^立の^立終^立
くまきりてあめくさく日暮
鳥鳴アウリかかれぬ小枝灯
只一羽泣きしるる音の音
又もあめくさく物もさく
一くさくあめくさく峰の麻

さゆきとてきしも鳴る雨の聲
雨くもききまのつら^えく^え岸の荒
松つさきまの鳴りや^あ鳴
月の中は晴くもや^あ鳴子小屋
多郎を月あき^あ車せ^あ鳴子曳
葦のよつとて^あ候し^あ紫菀は
中のよは^あ小^ああ^あふ^あり^あや^あ志し^あをよ
月よぬれて^あき^あく^あ伸し^あ紫菀は

秋の山をく思^あて^あき^あら^あよ^あり^あ紫
秋もく^あの^あ海^あを^ああ^あや^あ秋の山
を^あし^あく^あ写^あを^あ勤^あも^あ本^あの^あま^あら^あな
末^あ柘^あで^あ風^あの中^あよ^あも^あ風^あの^あいろ
ま^あま^あれ^あ流^あれて^ああ^あれ^あ野^あを^あか
移^あ書^あや^あ細^あの^あ切^ある^あ古^あま^あし
ま^あは^あの^あせ^あた^あく^あく^ある^あ嬉^あ捨^あは
ま^あと^あぬ^あく^あい^あぬ^あき^あり^あ持^あひ^あて^あ秋^あの^あよ

林間煖酒
焼紅葉

想を尽せし一淋しう秋や紅の樹
右高司の標とまきて新酒は
秋のしるをこころみぬ心一菊の星
まくの花るい面こそ白ひりり
志しゆくよそ秋をちかしの積のあふ
水子より日の透し一紅葉が
山石角一酒をこころせし一紅葉が
まつちうとあそむとくもの秋葉が

市中喧

市中の喧れあそび秋のくれ
秋の暮のあそびまはれほしき
秋のたにまはれあそびまはれほしき
冬あそびあそびぬ山あそびこころ家
秋あそびあそびあそびあそびあそび

水

水

溪つきの里に時雨のさしや
しるしや竹をうらむとと
新
水もあや踏みぬをえをふく
ほろもくしるしるれを
子もほろや切るしるの軸
吹上の原
吹上てあまのをさよむぶ子も
鯨実毎や一人のこちち雄
山のをえかこいしるしるさる

梅さくしるしるあれ
霧く那
幸抱え人のたかよ
美
真清やかんさしるも
若也

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

追加

四時混交

あふるる卯の余念をたうらうら

畑やで散い松子なる日中

つらつらと柳

志
玉の寺
廣

たんろく馬しろく二つ

夕映のこさき葉様を移りり

葉のさかきやささしくとくは

卯のさやたしくありの松古坂

京は有る甲斐をたうらうら

移つたや椎のくさみは冠は

アキのいさぎのかきなるまは

朝をさやましく光るあみと

椿葉や荒の角なる日

行
源
志

玉川はよよ雪をな

志
松
月
院

右塔や秋をよる

小
金
井
二
夕

甲斐を宿よ末いつく花をのさ

三つよびの向志の草も海もあふ

軒新田社

ぬうつけた休の象風で秋の寂

自新
七

豆もこけふはるをたぬあめ

行例ははのちりり電の丁志

陣やあふはるをたぬあめ

急不やうれ送とちりりまめす

月あさきふるほえく新河也

...

菊いろくともよまきまもりり祭

老鶯景
互爰

りよいも山部公とたい

八采園
庭多松

あるを八口とりやさくら

葎雪菴
北元

月あよもえぬほくま

雪中菴
對山

山吹は柄もまき

鶯笠菴
對竹

のこもねとハキのふもて山くま

暉雪菴
黒駱

茶はるや折て一白の上

八菓
蕉雨

二日めよまき

月院社
何丸

ゆきこしーすまきまふらあぬは木権垣

三井園

鉄齋

遊少時ふにうらぬりー月夜が

柳隣菴

国甫

そとれ峰人よもふたつ 柑のまつり

採茶菴

万里

引鶴のきりや筆を風つとれ

杜格齋

景山

階と雨のふ鶴よりきん松もかな

田喜菴

獲物

りまや葉葉よあふる朝は雨

半樂菴

其由

ふらなる氣の静を田一はを

鳩来菴

風谷

よーあしけ行葉唱一りおのふ鶴

渭濱菴

蛙水

ほくまき坂下車をひくうら

斗雪齋

吼月

明星や沙を器ーは湫の音

閑月菴

竹妓

白兔園

竹道

太白堂

孤月

せーくふ及花梅の本戸ひとつ

寸松齋

艸石

懐くふ家お子もふ一は梅角晴ー

今日菴

元風

ひとさうもふよ解の八扶 疆

時々菴

樗山

る影や柿のそけふのほれ 水

宝雪菴

蘭山

白眼臺

雪文

一齋

風松

木谷菴

橘童

天井の傍ハ能く松のたれ
卯の急や菜苗よりれ外曲端

芦原菴

素因

芒よりこぼれし物りも流る

楓亭

車両

つれ鶉の羽さきさきしてせ流る

芳齋

大梅

采子もふりまぢれえさハうき

小篋菴

碓令

けしのも喉ふてきき茶吹うな

金令舎

應々

一匙向ふりまぢりてりし心も風
却もか辰川まであきうな
心憂を流してりや影のる
洛外の町は入るむき田うな
をら秋や女もまき手のつら

雪水菴

茶静

梅室

雪雄

坎窩

久藏

一具菴

夢南

相園

詠歸

